

平成27年度研究成果中間報告書《平成27年度指定教育課程研究指定校事業》

都道府県・ 指定都市番号	23	都道府県・ 指定都市名	愛知県	研究課題番号・校種名	2 小学校
				教科・領域名	社会科
研究課題	<p>学習指導要領の指導状況及びこれまでの全国学力・学習状況調査結果から、学習指導要領の趣旨等を実現するための教育課程の編成、指導方法等の工夫改善に関する実践研究</p> <p>① 社会的事象の見方を養う授業づくりについて、1時間ごとの授業において、時間的な見方、空間的な見方、事象を相互に関係付けた見方を養うように意図した板書と資料提示の在り方の研究</p> <p>② 以下の教材開発を研究する。</p> <p>(ア) 第3学年及び第4学年の「地域社会における災害の防止」において、地震や風水害に備える行政や地域の人々の働きの教材開発を行う。その際、行政等から発信される災害情報の活用も取り上げる。</p> <p>(イ) 第5学年の「自然災害の防止」において、自分たちの住む地域の地理的環境の教材開発を行う。その際、地域で発生した自然災害の歴史も取り上げる。</p> <p>(ウ) 第6学年の「我が国の歴史上の主な事象」の学習において、地域の文化遺産の教材開発を行う。その際、地図や年表等を使って、我が国の歴史上の事象と関連付けることに留意する。</p>				
ふりがな 学校名 (児童数)	おがきしりつおとがわしょうがっこう 岡崎市立男川小学校 (児童数606人)				
所在地 (電話番号)	愛知県岡崎市大平町字中道17番地 (0564-22-1159)				
研究内容等掲載ウェブサイト URL	http://www.oklab.ed.jp/weblog/otogawa/				
研究のキーワード	・社会的事象の見方 ・板書計画 ・資料 ・地域教材 ・ESD				
研究成果のポイント	<p>① 授業展開を想定した板書計画による、意図的な板書</p> <p>② 授業で使う資料の収集・選択・提示の方法</p> <p>③ 男川の風水害の教材化による防災意識の高まり</p> <p>④ ESDの視点での「思考力・判断力・表現力」の向上</p>				

1 研究主題等

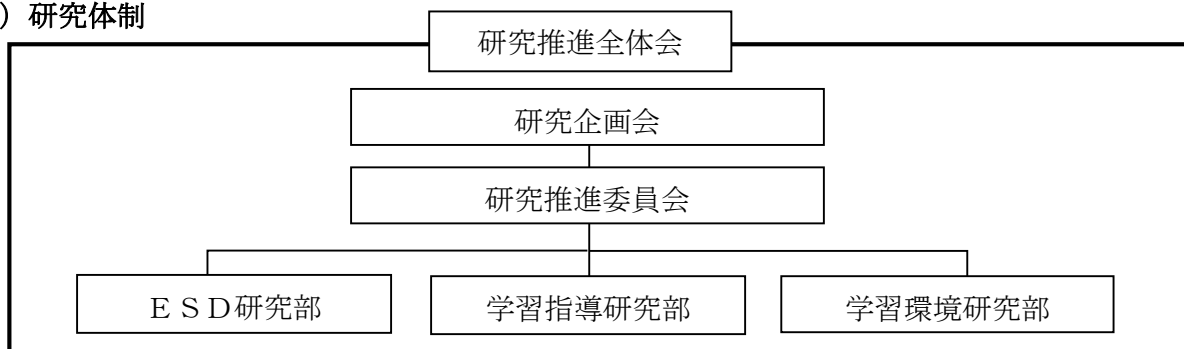
(1) 研究主題

社会的事象の見方を養う授業づくり ～「板書」や「資料提示」の工夫を通して～

(2) 研究主題設定の理由

- 平成26～27年度に国立教育政策研究所 教育課程研究指定校事業 研究課題3(4)「ESD」の研究指定を受け、「ESDの視点に立つ教科学習の展開」を推進する中で、「社会科」の目標達成や学習内容の理解に迫るために、「社会科における思考力・判断力・表現力を高める教材開発や指導方法の工夫改善」の必要性を強く感じた。
- 本校の子供たちは、指示されたことに素直に取り組もうとするが、自分の考えを主張することが苦手で、新たなことに積極的に取り組んでいく意欲に乏しい。子供たちが自ら意欲的に追究する社会科学習を展開したい。

(3) 研究体制



(4) 1年間の主な取組

平成 27 年度	4月	○社会科を合科的、総合的に扱う実践単元の「立ち上げ方」の構想を練り、検討の上、実践に入る。 ○子供の発言を焦点化したり、切り返したりすることにより、子供の「思考力・判断力・表現力」を伸ばす手法を研究する。 ○研究全体会・校内研修【講師：校長、研究主任】 「社会科の思考力・判断力・表現力の見取り方」 ○文部科学省連絡協議会 社会科研究指導【講師：澤井 陽介 教科調査官】
	5月	○校内授業研究会【講師：校長師範授業】 「子供伸ばし、関わり合いを活性化する授業技術」
	6月	○指導員訪問授業【講師：加藤 環 岡崎市社会科指導員】 ○校内研修【講師：小幡 肇 氏（愛知学泉大学）】 「社会科授業展開の要所と実践の具体例」 ○校内授業研究会【講師：澤井 陽介 教科調査官】 「構造的な板書、資料提示、単元構想の在り方」
	夏季	○研究全体会・研究部会・学年部会・教科部会 ・研究発表会における授業の指導案検討会
	9月	○学級ごとに実践を進めつつ、アンケート、授業記録、子供のノート等により、実践単元の検証を行う。
	10月	○男川小学校 研究発表会（全23学級 授業公開） 「ESDの視点に立つ教科学習の展開」
	12月	○研究全体会・研究部会・学年部会・教科部会 ・実践の成果と、研究継続に向けての準備と計画
	2月	○男川ユネスコフェスティバルの開催 ・全学級が学習の成果を発表（保護者・児童参観）
	3月	○研究集録「育成98号」の編集と発行 ・各学級の実践記録と検証（成果と課題）

2 研究内容及び具体的な研究活動

(1) 研究内容

- ① 45分間授業展開を想定した板書計画を立てて臨み、授業後に検証する。
 - ・ 授業前に「実際の資料」や「予想する子供の発言」を想定した板書計画を立てる。授業後に板書上の子供の発言を相互に矢印などで結び、発言のつながりを検証する。
- ② 「授業で使う資料」の「収集・選択・提示」の在り方を明らかにする。
 - ・ 「つかむ段階の資料」「調べる段階の資料」「まとめる段階の資料」の効果的な「収集・選択・提示」の在り方を、各学年とも2単元以上で実践する。
- ③ 「男川の風水害の防止」や「縄文・弥生時代」「江戸時代」の教材開発を行う。
 - ・ 「男川の風水害の防止」については、第4学年で行政や地域による施策や共助の教材開発を、第5学年で地理的、地形的な視点による災害の歴史を取り上げた教材開発を行い、それぞれ実践する。
 - ・ 第6学年の「縄文・弥生時代」において、校区にある「村上遺跡」や「経ヶ峰古墳」等の文化遺産を活用した歴史学習の教材開発を行い、実践する。
 - ・ 第6学年の「江戸時代」において、校区にある「大平一里塚」や近隣の「岡崎城」等の文化遺産を活用した歴史学習の教材開発を行う。地図や年表等を効果的に使い、地域の偉人「徳川家康」を通じた教材開発を行い、実践する。
- ④ 相手意識を持って聴き合い、自ら学び、行動できる子供を育成する。
 - ・ 聴き手の反応を意識して語る話形（発言の途中で「～ですよ」「～じゃないですか」等で問い、聴き手の反応を探る）を確立し、本校の学習文化として定着させる。
- ⑤ 指導方法の工夫改善と、教師のさらなる授業力向上を目指す。

⑥ 社会科で培いたい思考力・判断力・表現力を、E S Dの視点に立った学習指導で重視する能力・態度(例)と関係付け、具体的な子供の姿で整理する。

(2) 具体的な研究活動

① 45分間授業展開を想定した板書計画を立てて臨み授業後に検証する。(第3学年の実践例から)

授業の前に、子供のノート記述や本時の授業の流れの想定から、板書計画を立てた。第3学年の小単元「わたしたちの岡崎市」では、店の多いと

	建物	交通	人	土地
東岡崎 (店)	店が多い(にぎやか) 高いビル(マンションビル) 岡崎城	バスが多い 電車が 車が多い(じゅうたい)	国道1号 人が多くにぎやか	乙川 平ら
西尾 (工場)	工場<くさい> での店(アピタ)	国道248号 車が多い トラックが多い	電車がある 人通りが少ない	公園 矢作川 平ら
岡崎 (緑)	高いビルはない 古い大きな家	バスが少ない 車が少ない(じゅうたい少ない)	人は少ない 運動場使いたいほうがいい	自然 緑がいっぱい(空気がきれい) 山<くすねる>かも 男 田畑が多い 夕焼け

まとめ 岡崎市にはさまざまな場所があり、それぞれの様子にはちがいがあがる。

ころ、工場の多いところ、緑の多いところの三つの場所について、「建物」「交通」「人」「土地」の4観点から、自分ならどこに住みたいかという学習課題を通して、「岡崎市には様々な場所があり、それぞれの様子には違いがある」ことに気付かせた。

この授業では、板書を3地区4観点到に区切り、共通する内容は黄色の線で、相対する内容は赤色の線でつなげることにし、前時の子供のノート記述を基に、発言内容を予測して板書計画を立てた。板書計画を立てたことで、本時のまとめにつながる板書にすることができた。【写真上参照】

② 「授業で使う資料」の「収集・選択・提示」の在り方を明らかにする。(第3学年の実践例から)

- ・ **収集** 「男川学区郷土誌 男川」「岡崎市史」「郷土読本おかざき」などの郷土史の本を読む、学区の地図を眺めたり学区を散策したりする、長年本校に勤めている教員から情報収集する、などをして学区域の特色を把握した。
- ・ **選択** 男川らしさを基準の一つにして選択した。男川学区は昔から繊維産業がさかんであり、軍手工場がある。3年は、農家、工場などの中からの選択で、学区には農家もその他の工場もあるが、第3学年の小単元「作業用手袋をつくる」では、男川学区らしさを考え、軍手工場を選択した。
- ・ **提示** 上記小単元の学習では、「つかむ段階」で地図帳の岡崎付近に載っている紡績のマークを提示し読み取らせた。また、岡崎で作られた「オカザえもん軍手」の実物を提示することで関心や問題意識を持たせるようにした。「調べる段階」では、近藤さんの軍手工場見学を行った。子供たちは、どうやって軍手が作られていくのか、実際に見たり、近藤さんに尋ねたりして軍手の作られる様子を調べた。見学後、見つけたことから、「近藤さんは、軍手を作るために、何をしているのかな」という学習課題につなげた。

「まとめる段階」では、道路と川(乙川)と反毛工場が載っている地図を提示し、「軍手工場はどのような所にあるのだろうか」という学習課題につなげた。子供たちは、水を使う工場は川の近くにあること、反毛工場が近くにあれば、すぐに糸を入手できること、そして、国道1号線や東名高速道路岡崎ICが近いことで、軍手の納入に便利であることなどを、読み取った情報を基に考えることができた。

③ 「男川の風水害の防止」の教材開発を行う。(第4学年、第5学年の実践例から)

第4学年の小単元「火事や水害からくらしを守る」では、絵を描く会で消防団の消防車を描いた経験や地域の防災訓練への参加経験、消防署見学などから、地域に根ざした消防団活動に関心を持った。その中で、消防団は火事を消すだけでなく、2008年の水害のときにも活動したことを知り、消防団長さんから話を聞いたり、家の人の体験談を聞いたりして、消防署、消防団、行政、地域の人たちが協力し合って水害などの災害に備えていることを追究していった。さらに、自分たちでも何かできないかと考え、学区の防災マップを作る活動をした。

第5学年の小単元「男川学区の水害」では、2008年8月に学区の一部が浸水した豪雨災害について、聞き取り調査や防災マップの読み取りなどから、自然災害に対して関心を持った。そこから、そのときの水害の様子や2000年の東海豪雨、岡崎市の防災への取組についての追究が始まった。

その中で、学区を流れる乙川沿いには低い土地があり、そこが浸水しやすいことに気付いた。そこから、あるグループは、標高と乙川との距離から、主な施設の危険度を順位付けした。そして、学区北東部にある中央総合公園が避難場所として最適であることを見つけ出した。

④ 相手意識を持って聴き合い、自ら学び、行動できる子供を育成する。

発言をするとき、「～ですよ。」「～じゃないですか。」と聴き手の反応を意識した話し方を指導した。聴いている子供には、「はい」と答えたり、うなずいたりして反応するように指導した。こうすることで、発言者は相手が分かってくれるように話す工夫をし、聴き手には理解しようとしてよく聴く姿が見られた。また、発言時は必要に応じて黒板を使い、壁やテレビ画面の資料の前に進んで行き、話すように促した。その結果、多くの子供たちが「前へ出ます」と言っており、資料を基に話せるようになった。

⑤ 指導方法の工夫改善と、教師のさらなる授業力向上を目指す。(第5学年の実践例から)

第5学年の小単元「どうなる!? 日本の食料生産」の導入では、ハンバーガーの試食をしたり社会で話題になった出来事を新聞記事で紹介したり、家族への聞き取り活動を行わせたりすることにより、農業や食料問題に関心を持たせるようにした。食料自給率、TPPなどの政策面を含めて、いろいろな視点から考えられるよう指導方法を工夫した。

また、子供の追究意欲を低下させずに自分の力で資料を集めることができるよう、資料選択の幅を狭めない範囲で使う資料を提示し、選択して調べさせるようにした。ただし、自ら見つけた資料や自分の生活体験などは称賛しながら、必要に応じて示した資料以外にも目を向けさせるようにした。

⑥ 社会科で培いたい思考力・判断力・表現力を、E S Dの視点に立った学習指導で重視する能力・態度(例)と関係付け、具体的な子供の姿で整理する。(第3学年の実践例から)

3年「お店のひみつ発見」では、お客さんがヒラク(学区の中型スーパー)へ行きたくなる秘密について話し合う場面では、例えば、店の広さについて、お年寄りや早く買物をしたい人にはヒラクの狭さが良く、若い人やじっくり選びながら買物をしたい人にはピアゴやイオン(大型スーパー)の広さが良いというように発言がつながり、建設的な話合いが進んだ。育てたい能力・態度を指導案に明示することで、それらを意識した授業展開ができた。

3 研究の成果と課題

(1) 成果

- ① 授業展開を想定した板書計画を立てることで、発言のつながりを事前に予測することができ、子供たちの発言をつなぎながら、教師側が意図した板書にすることができた。
- ② 授業で使う資料は、郷土史を読んだり、地図を眺めたり、教員同士で情報収集をしたりすることで収集できた。それを単元レベルに落とす中で、使いたい資料を選択できた。さらに、授業の中のどのタイミングでどの資料をどのように提示するのかを考えることができた。
- ③ 男川の風水害を教材に取り上げ、学区の最適な避難場所を考えたり防災マップを作ったりすることにより、防災に対する意識を高めることができた。
- ④ E S Dの視点で育てたい能力・態度を指導案に明示することで、それらを意識した授業展開を通して、子供たちの思考力・判断力・表現力を伸ばすことができた。

(2) 課題

- ① 出された発言の中には、誤ったものや的外れのものもあるが、子供の意見を大切にするために発言したものは基本的に板書するようにした。そのため、一部に誤った認識をさせてしまう恐れのある板書になることもあった。その際の取扱いを考えていく必要がある。
- ② 思考・判断・表現をするために必要な資料や情報を適切に選択して提示しても、振り返り等のノート記述からは、思考・判断・表現の状況を十分に読み取ることができない子供がいる。全ての子供たちの「思考力・判断力・表現力」を伸ばすための手立てを具体的に明確にする必要がある。

(3) 研究2年目へ向けての取組

- ① 研究課題のうち第6学年の歴史学習の教材開発を行うことができなかった。本年度の実践を踏まえ、過去に扱った実践も参考にしながら、今後研究実践を行う。
- ② 子供たちが理解を深めるための構造的な板書の工夫ポイントを明らかにする。